

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

# 母のありがたさ

鳥越中学校三年

善田 ぜんだ

千弥子 ちやこ

私は今、思春期で家族に強く当たってしまうときがあります。中でも母には特に強く当たってしまうのです。

私の母は教師で、私が三歳のときに教員免許を取りました。仕事がいそがしかったのか、朝が早く、夜も遅い母とは、話したという記憶があまりありません。私が覚えているのは、保育園に行く日は、母が私を家の近くにある祖母の家に送り届けてから仕事に行く、ということだけです。保育園で、親と何かをする行事には母が来てくれましたが、それが終わると当然、母は再び仕事に戻ります。私は母と別れたくなくて、いつも泣いていた気がします。しかし、何度か誕生日を迎えるうちに、私もだんだん母の仕事を理解し、泣く回数も減りました。それでもやはり、卒園するまでは母と別れるのがとても辛かったです。

私が小学校に入学し、初めての授業参観というものがありません。もちろんそれには、母が来てくれました。しかし、小学校三年生のときの授業参観に母は来ませんでした。理由は、母も小学校教師をしていたため、予定が合わなかったからです。その日は親に関することを学ぶ授業でした。みんなは後ろを向いて親を見ていましたが、私は後ろを向くことができませんでした。「もしかしたら」と思い後ろを見ましたが、やはり母の姿はありませんでした。

小学校の卒業式の日、その年は母も六年生を担任し、卒業式の日も同じだった為、母は来られるか分からない状態でした。結局、母は卒業式に来ることができませんでした。母の代わりに父が来たけれど、やはり私は、母に、校長先生から卒業証書をもらうところを見てほしかったのです。母が来たのは、卒業式の後、教室にいるときでした。その姿を見て、私はなぜかホッとしました。

中学校に入ると、部活も始まり大変だったけれど、母が帰ってくる時間まで起きていたので、話す機会が多くなりました。でも、母は疲れているため、あまり話を聞いてくれませんでした。その頃から、私は家であまり話さなくなり、いつの間にか思春期が来ていたのです。

以前、母が私の思春期について話してくれました。私は兄と姉が一人ずついて、一人とも思春期がすでに来ていました。口は悪くないけれど、家では話さない兄。口が悪くなるけれど、家では話す姉。二人の思春期は、こんな感じで、私の思春期は、口が悪く、家ではあまり話さないという、二人の悪いところが合わさったような思春期だと言われました。私は思春期である兄と姉のことを研究していたから、思春期のことはよく分かっていたはずなのに、二人の悪いところが私の思春期となってしまうのです。

そんな私でも、母に尊敬と感謝の気持ちを抱いていることがあります。一つ目は、私が助けを求めているとき、私のそばにいてくれることです。例えば、自由研究で図書館に行くとき、病院に行くとき、私がかぜをひいて苦しんでいるとき、いつも母はそばにいてくれます。二つ目は私に沢山アドバイスをくれることです。例えば、体験入学をする高校を決めるとき、母は私に「受験する高校に必ず行かないといけないよ。みんなが行くからそこに行く、じゃなくて、素直に自分が行ってみたいなんていう高校に行けばいいんだよ。」と言ってくれました。みんなここに行っているから行くということに縛られずに、高校を決めることができました。私は最初、高校に一人で行くのは嫌だなという理由で体験する高校を選ぶようしていました。その反面、本当は違う高校に体験に行きたかったのです。それを母に言うと、先程のアドバイスをくれました。また、高校のことを詳しく分からなかった私に、母は色々なことを教えてくれました。高校をどこに決めようか悩んでいた私にとって、母はとても頼りになりました。

今では、志望校も決まって、勉強を頑張っています。それなのに、母は私に、「もっと、勉強しなさい。」「勉強しとる？」と言います。その度に私は悲しくなります。なぜなら、母には私が勉強していないように見えているのかと思うからです。確かに、私より勉強をしている中学三年生は沢山います。だから私も今まで以上に頑張ろうとするけれど、急に

勉強をしようとしても、できるはずがありません。かつて母に、勉強の仕方について聞いてみました。母は、教師になるために沢山勉強をしたと言っていました。私も母のような人になりたかったので、勉強を頑張ろうと思うようになりました。あのときのことを、今もう一度、思い出したいと思います。

私はまだまだ思春期で、母に強く当たってしまいます。けれど、そんな中でも、母を尊敬していて、母に感謝していることを忘れずにいられたらいいなと思います。そして、いつか母に、「思春期の頃は強く当たってしまっただけで、いろいろなアドバイスしてくれたおかげで自分自身の行きたい道へ進むことができたよ。ありがとう。」という感謝の気持ちを伝えたいです。

